慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　１回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

since 1917 Keio University School of Medicine

平成29年度 入学式

医学部114名が入学

平成29年4月3日に慶應義塾大学入学式が日吉記念館にて行われた。式典は午前の部と午後の部の2部構成で行われ、午前の部には法学部、商学部、理工学部、別科日本語研修過程が参加し午後の部には、文学部、経済学部、医学部、総合政策学部、環境情報学部、看護医療学部、薬学部が参加した。

式典においては、開式ののちに長谷川彰常任理事によって学事報告が行われ、各学部の入学者数が発表された。本年度の入学者数は6513名、医学部114名、看護医療学部102名、薬学部222名であった。慶應義塾大学全体としても医療系学部としても昨年度の入学者数から大きな変化は見受けられなかった。

続いて、清家篤塾長により式辞が述べられた。塾長は、数多くの新入生が慶應義塾大学へ入学したことに対する喜びの言葉とともに、大きな変化の時代を生きる我々塾生のあり方について、福沢先生が説かれた三つの言葉を挙げて話された。具体的には、時代に応じて相対的に大事なものを見抜く「公智」、自ら科学的に考えて実証する「実学(science)」、休んで餌を食べている雁の群れの中でただ一羽あたりを見回して仲間を守る「奴雁」である。奴雁のように広い視点で今という時代を見据えて将来への確かな展望をもち、実学に基づいて公智を働かせる、そんな塾生になってほしいという激励のメッセージを新入生に送られた。

式辞に引き続き、清家塾長によって壇上者の紹介がなされた。教職員代表式辞において薬学部の木内文之教授は、何事も目的を考えて取り組むことの重要性について述べられた上で、心身ともに健康で充実した学生生活を送り、実社会で生きていくための力を蓄えてほしいというお祝いの言葉で締めくくられた。

新入生代表入学の辞として医学部の井原諒さんは、慶應義塾において社会に活かせる実学としての医学を学び、治療が行き届かない地域や感染症のために貢献したいという思いを語った。加えて、社会の先導者となるべく仲間たちと切磋琢磨していきたいという大学生活への期待が述べられた。

その後、卒後50年記念1967年（昭和42年）三田会寄付目録贈呈・挨拶として代表の岡野光喜さんからお話を頂いた。岡野さんは一日一日を大切にすることや、常識にとらわれない探究心をもつことの重要さを強調された。挨拶の後に1967年三田会からのご支援の贈呈が同会幹事の青木雄二さんによって行われた。

最後に塾歌の斉唱が行われ、晴れやかな雰囲気の中で閉式となった。新入生6513名の入学を喜ぶとともに、今後の活躍に期待したい。

（6年　中村健吾）

入学式風景

第12回 白衣式
感謝を胸に、いざ臨床実習へ

去る3月25日、平成28年度白衣式が、本塾北里講堂にて執り行われた。白衣式は、24年前に米国コロンビア大学で行われたのを初めとし、臨床実習に臨む医学生にプロフェッショナリズムを意識させるための行事として、今や世界中の医学部で採用されている。本塾では、2006年に日本初である第1回目の白衣式が行われ、今年で12回目を迎える。

式典には岡野栄之医学部長、竹内勤病院長、北島政樹国際医療福祉大学副理事長、武田純三三四会長らが列席し、臨床実習を控えた98回生（新5年）111名に、祝辞を送られた。

岡野医学部長は、慶應医学部の歴史を話された後、慶應病院の新棟で初めて臨床実習を行う98回生を、祝福された。竹内病院長は、歴史のある北里講堂で白衣式を行えることを祝うとともに、北里先生が福澤先生に送った七言絶句を引用し、病気を自然のままに進行させず、あらゆる手段を持ってそれに対処していく心得を示された。その後、臨床実習で学ぶこととして、感性を持って患者さんと向き合い、観察力と興味を持って、教科書に書いていない知識を得てほしいと、述べられた。武田三四会会長は、白衣を着るだけでなく、中身を身に着け、白衣に着られるものでなく、白衣をきるものであれと、学生たちを激励された。北島政樹先生は、慶應医学部100年のルーツと、自身の過去の業績を学生たちに語り、激励するメッセージを送られた。

その後、98回生が信濃町の2～4年生の授業でお世話になった各科の先生方からのメッセージビデオ（98回生制作）が放映され、懐かしい先生方からの温かい言葉に会場は和やかなムードに包まれた。

そして、いよいよ白衣の授与である。参加した学生一人ひとりが、医学部・病院の執行部の先生方、小松浩子看護医療学部長、杉本芳一薬学部長、来賓の先生方に白衣を着させて頂いた。

真新しい白衣を着た学生がずらりと並ぶと、会場からは大きな拍手が沸き起こった。今年は例年同様、北里講堂に入りきらなくなるほど父兄の参加が多く、父兄らの関心の高さが伺えた。その後、98回生111名により、誓いの言葉が唱和された。

誓いの言葉は、有志により組織された白衣式委員会を中心に、98回生全員が協力し、数ヵ月をかけて考えられたものである。111名が声をそろえて誓いの言葉を読み上げると、会場からはより一層大きな拍手が沸き起こった。

最後に、平形道人医学教育統括センター長が閉会の辞で医師にとって大切な資質について述べられ、新しい一歩を踏み出そうとする98回生を励ました。

この白衣式にて白衣を受け取ることで98回生は医療界の門戸を叩き、実際の臨床現場に出て医療および医学をより深く学んでいくことになる。4月から始まる臨床実習では、たとえ悩み迷うことがあっても初心に帰って誓いの言葉を反芻し、日々研鑽を積んでいきたい。

（5年　牧原京平）

北里講堂前にて

98回生　誓いの言葉

―義を見てせざるは勇無きなり―

『自我作古』
常に向上心を持ち、勇気と使命感を持って、挑戦し続けます。

『率先垂範』
積極性を持って、人々の先頭に立ち、模範を示します。

『報恩謝徳』
これまでに得た、全ての恩恵について、常に感謝し、務めを果たします。我々98回生は医療者として、ここに誓います。

イノベーションを創出せよ！ 慶應発ベンチャーの流れ

第1回

〈はじめに〉もとめられる医学部発イノベーション

眼科教授
知財・産学連携タスクフォース長　坪田　一男（59回）

ご存知のように学校教育法が2015年6月26日に改正され、大学の責務として教育と研究に加えて、イノベーション創出が加わった（医学部の場合は臨床も責務として入る）。（表1参照。学校教育法改正書面）

この流れを受けて岡野栄之医学部長のもと知財産業連携タスクフォースが2015年10月に作られ、医学部における産業創生、ベンチャー創生のための基盤作りを行ってきた。先日研究連携本部の伏見知行さんが医学部新聞3月号で書いてくれたように義塾全体でも大きな流れに発展しつつあるのは周知のごとくである。しかしながら現在医学部におけるイノベーション創出への意欲は低く、2016年1月に行った医学部生および医局の先生方の意識調査（N＝242）ではなんと11％の方しか興味を持っていないという現実が明らかになっている。これはハーバード大学や、MIT、サタンフォード大学など世界一流大学の学生やスタッフにおいては90％もの人たちがイノベーションに興味を持つとの意識レベルから考えると非常に低いと言わざるを得ない。

そこでタスクフォースでは定期講演会や、健康医療ベンチャー大賞などの企画を通してイノベーション創出事業の底上げプロジェクトを実施している。イノベーションは大学はかりにとどまらず、開業の先生や病院で働く先生でも従来の〝保険診療の枠〟にとどまらず新しい検査法や、治療法、検診や治療システムを開発、改良して世の中をよくしていこうとしている動きが含まれる。そこで今回医学部新聞では6回シリーズとして慶應医学部におけるイノベーション創出の現状をお伝えしたい。

まず今回は先月行われた医学部主催の〝健康医療ベンチャー大賞〟の様子を実行委員長の田澤雄基先生に報告いただく。その後、現在始まりつつある医学部発ベンチャーについて解説を行っていただき、動きつつある息吹を感じてもらえれば幸いだ。

表1

学校教育法

昭和二十二年三月三十一日　法律第二十六号
改正　平成二七年六月二六日　法律第五〇号

第９章　大学　第83条

1．大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く　専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする。―研究と教育―

2．大学は、その目的を実現するための教育研究を行い、その成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。　―イノベーション創出―

第1回 健康医療ベンチャー大賞 決勝大会開催

精神・神経科
健康医療ベンチャー大賞実行委員長　田澤　雄基（93回）

3月26日、慶應義塾大学医学部主催による「健康医療ベンチャー大賞」の決勝大会が開催されました。ご協力頂きました多数の皆様に厚く御礼申し上げます。

本コンテストは慶應義塾大学医学部発のベンチャー育成の機運を高めるために、岡野栄之医学部長の下に設置された〝知財・産業連携タスクフォース〟により企画されました。慶應義塾内の他学部はもちろん、他大学や市中病院、また民間企業の塾員といった、学部間の壁、大学間の壁、そして大学と企業の壁も越えて70チーム以上の応募がありました。

予選では、学生部門と社会人部門からそれぞれ5チームずつが選出されました。選出された計10チームは、2度にわたるヘルスケアベンチャーの専門家によるメンタリングを受け、それぞれのビジネスプランをブラッシュアップしました。決勝大会は、慶應義塾大学三田キャンパス北館ホールにて開催され、清水雅彦常任理事、國領二郎常任理事、岡野栄之医学部長、坪田一男タスクフォース長も挨拶に立ちました。観覧は募集開始後早々に満員御礼となり、北館ホール・同時中継のサテライト会場も含め、熱気に包まれました。学内外からお集まりいただいた審査員から、時として厳しい質問が浴びせられる中、各チームはそれに耐え、見事なプレゼンテーションを披露いたしました。

そして、厳正な審査の結果、慶應イノベーション・イニシアティブ（2016年に設立された慶應発のベンチャーキャピタル）社長である山岸広太郎審査委員長より審査結果が発表されました。

学生部門で優勝を勝ち取ったのは、東京オリンピック開催に合わせた外国人向けの遠隔診療を提案したチーム「DocTravel」です。医学部の2年生を主体としたチームで、学生部門の中でも最年少のチームでありましたが、時流を捉えたことはもちろん、学生ならではの柔軟さが勝因となりました。

社会人部門で優勝を勝ち取ったのは、独自開発のソルトチップを活用した減塩プランを提案したチーム「It Taste」でした。このチームの主体は理工学部の博士課程の学生ですが、チームメンバーには所属する理工学部研究室の准教授や他大学内科学の教授を加え、確固たる研究成果に裏打ちされた、まさに大学発ベンチャーの王道として優勝の栄冠を獲得しました。

また、ご協賛頂いた日本マイクロソフト社による特別賞には、社会人部門からチーム「Epigno」が選ばれました。このチームは慶應ビジネススクールに通う医師を中心としたチームで、人工知能を活用した手術室の稼働効率化のプランを提案しており、医療現場の働き方の改善に繋がる点が評価されました。

表彰台に立った3チームのほか、大会参加の全10チーム、そして応募のあった70チーム、いずれも劣らぬポテンシャルとパッションが光っており、観覧者にとっては健康医療領域における大学発イノベーションの息吹を肌で感じられる1日になったものと思われます。

慶應義塾大学医学部として、真にグローバルで活躍できるリーディングベンチャーを輩出するための今後の課題が認識されるとともに、コンテストという形式の枠に捉われず、大学の強みを活かしつつ官民協力し、さらなるベンチャー育成の仕組みを創り出していく必要性が再認識されました。

〈審査委員〉
青山藤詞郎　慶應義塾大学理工学部長／理工学研究科委員長
大石佳能子　株式会社MEDIVA代表取締役社長
河上　裕　慶應義塾大学 医学研究科委員長
河野　宏和　慶應義塾大学 経営管理研究科委員長／ビジネス・スクール校長
中村　慎助　慶應義塾大学 経済学部長
村井　純　慶應義塾大学 環境情報学部長
山岸広太郎　株式会社慶應イノベーション・イニシアティブ代表取締役社長
（50音順、敬称略）

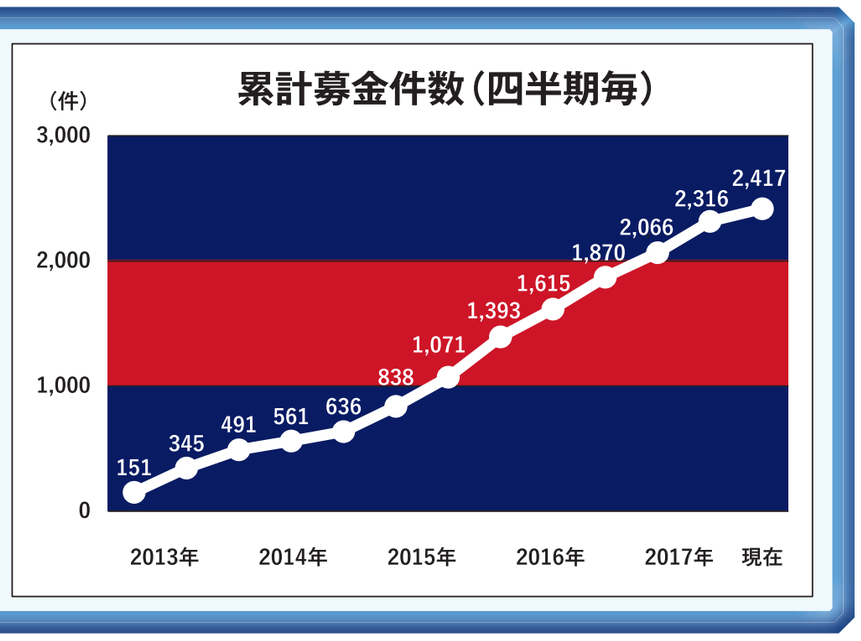
岡野医学部長と審査員の先生方

大賞受賞者たち

新病院棟建設募金
注目！ あと1年！
あなたの募金が慶應医学の将来につながります！
今こそ全ての三四会員が協力を！
募金された方々の名前が残ります（銘板が計画）

【手続きに関する問い合わせ】
慶應義塾基金室（三田）
TEL：03-5427-1898
FAX：03-5427-1546
E-Mail：kikin-box@adst.keio.ac.jp

三四会募金事務局（信濃町）
TEL/FAX：03-3356-5568
E-Mail：shintoubokin@sanshikai.jp



鑑賞知来

「お前は昔、本ばかり読んでいたな」。先日、高校の同窓会で久しぶりに再会した友人に言われ、ハッと気付いた。読書が好きで週1冊以上のペースで読んだ時期もあったが、この数年は読書の機会がほとんどなくなっていた。頻回に開くのは仕事関係の「本」であり、要はjournalや手術手技書などである。少し反省し、以前繰り返し読んだ本を久しぶりに開いてみた。

「事実の読み方」。本書は、筆者の柳田邦男氏が、政治、経済、外交など様々な問題を通し、事実の読みとり方を説いたエッセイ集である。昭和56年から58年に書いたエッセイをまとめたものなので、引用されている問題は古いが、その根底に流れるものは今も変わらない。筆者は、問題の本質を見極めるには、事実をありのままにとらえること、そして、視点を裏側とか斜め上、あるいは相手の立場や海の向こうへと、複眼で柔軟に移動して見つめることが重要であると繰り返し説いている。事実をありのままに見つめること、これは簡単なようで非常に難しい。この本を読むと、自分が日頃、先入観や予断、憶測にとらわれていることが多いことを思い知らされる。自分は様々な視点から公正に物事を見ることができているか、そう自らに問うときに手にとる本である。

この本から学んだ「物事を見る視点をどこに置くかによって、対象の姿は変わって見えてくる」という考え方は、私の28年間の医師としての生活にも大いに役立っている。固定観念に囚われると診断、治療を誤ることがあるかもしれない。私が思う「最善の治療」も患者さんの視点ではそうでないかもしれない。

「視点を変える」ことを自分が常に実践できているかというと、自信はない。しかし、本書を初めて読んだ学生時代から自分なりに努力はしているつもりだ。数年ぶりに本書を読み、初心に戻れた気がした。

（整形外科学教室　佐藤和毅　68回）